

研究ノート

## 「臥薪嘗胆」の授業

—「十八史略」教材の長所と短所—

### On a Lesson of "Gashinshotan (臥薪嘗胆)"

村山 敬三

Keizo MURAYAMA

キーワード：臥薪嘗胆、「十八史略」教材、漢文指導

#### 一 はじめに

「臥薪嘗胆」<sup>がしんしょうたん</sup>は、主に「総合国語」の史伝の単元でよく採られている教材である。筆者はかつて公立高等学校の教員として、国語の授業を担当していた。筆者は何回となくこの「臥薪嘗胆」の授業を行ったが、やりやすさと同時にやりにくさを感じることもあった。そのやりにくさは、多分にその出典である「十八史略」という書物の性質に由来するものではなかったかと筆者は考えている。

「十八史略」教材には、他に「先づ隗より始めよ」「鶏鳴狗盗」などいくつかある。「臥薪嘗胆」も短くまとめられているだけに小話のごとき印象を与えてしまう恐れがある。しかし、読んでみると文章はけっこうむずかしい。「臥薪嘗胆」の特長な点は、数十年にわたる歴史がそこに盛り込まれていることである。この教材には長所と短所があるように感じる。では、本文の中でどこがどのように問題となるであろうか。

以下に「十八史略」教材の長所と短所について考察を加えながら「臥薪嘗胆」の授業展開について考えてみたい。なお、ここでは「臥薪嘗胆」の本文（段落分

け）を、便宜上大修館書店の「総合国語 改訂版」にしたがって示すことにする。

#### 二 「臥薪嘗胆」教材の長所

「臥薪嘗胆」は五つの段落に分けられている。それぞれの段落の要点を、本文と共に記してみよう。

1 子胥が呉王闔廬に仕え、楚の都郢に攻め入ったこと。

（呉王闔廬、挙伍員謀国事。員、字子胥、楚人伍奢之子。奢誅而奔呉、以呉兵入郢。）

2 子胥は夫差にも仕え、夫差は父の仇討ちのため薪中に寝起きし、遂に越を破ったこと。

（呉伐越、闔廬傷而死。子不差立。子胥復事之。夫差志復讎、朝夕臥薪中、出入使人呼曰、「夫差而忘越人之殺而父邪。」周敬王二十六年、夫差敗越于夫椒。）

3 越王句踐が会稽山で許しを請い、国に帰ったあと胆を嘗めて復讐の気持ちを

忘れず、范蠡と兵を訓練したこと。

（越王句踐以余兵棲会稽山、請為臣妻為妾。子胥言、「不可。」太宰伯嚭受越賂、説夫差赦越。句踐反国、懸胆於坐臥、即仰胆、嘗之曰、「女、忘会稽之恥邪。」挙国政属大夫種、而与范蠡治兵、事謀呉。）

4 子胥が太宰嚭の讒言によって、呉王から死を命じられたこと。

（太宰嚭、譖子胥恥謀不用怨望。夫差、乃賜子胥属鏃之劍。子胥告其家人曰、「必樹吾墓槨。槨可材也。抉吾目、懸東門。以觀越兵之滅呉。」乃自剄。夫差取其尸盛以鴟夷、投之江。呉人憐之、立祠江上、命曰胥山。）

5 越が呉を攻め、夫差は子胥に合わせる顔がないと言つて死んだこと。

（越、十年生聚、十年教訓。周元王四年、越伐呉。呉三戰三北。夫差上姑蘇、亦請成於越。范蠡不可。夫差曰、「吾無以見子胥。」為悞冒乃死。）

「臥薪嘗胆」は、呉越の数十年にわたる攻防を背景とした話であり、本来の歴史書であれば、呉王闔廬のことから夫差の死に至るまでは多くの叙述が費やされるべき豊富な材料に満ちているはずである。しかし、この文章は、以上要約したように実にコンパクトにその歴史がまとめられている。

さらに教材として見ても、この話は復讐というテーマが極めて分かりやすく述べられている。その分かりやすさは、「臥薪」と「嘗胆」という印象的で具体性を持った語が対となって描写されていることに最も大きな理由がある。加えて、呉と越の対立の構図のなかには、王と臣下の組み合わせの対比も巧みに考えられている。そのような対比を話の軸として据えながら、賄賂をもらつて讒言する太宰嚭の、悪役としての人物像が描かれ、子胥と夫差の二人がその死に臨んで残した特異な言葉も記されている。それらはこの史伝に奥行きを深さを与えている。以上は、学習者に史伝教材を興味深く学習してもらおうという点において、充分な長所と言えるであろう。

また文法や訓読の指導においては、使役（「出入使人呼」）、疑問（「而忘越人之殺而父邪。」）の句法は重要である。「謀らしむ」「赦さしむ」や「誅せられて」など文脈上の使役・受身の用法も学習できる。さらに、いわゆる句法ではないが、「盛以鴟夷」は「A以B」（AするにBを以てす）という構文で、類出の構文である。ここでぜひ訳し方を説明しておきたいものである。「以る」「為る」などの語の読み方も覚えさせたいし、返り方については、大体が平易である中に、一か

所だけ「太宰嚭、譖子胥恥謀不用怨望。」が上下点まで使われており、指導するのにちょうど良い。これはたとえば、入門期を過ぎ、少しずつ漢文を読み慣れてきた段階であるとしても手頃な教材である。以上、文法や訓読の指導という点から見てもこの教材は長所をもっていると言えよう。

### 三 「臥薪嘗胆」教材の短所と授業展開の工夫

『十八史略』は、「史記」以下の十七正史に宋代の史料を加え十八史とし、これを簡略にした史書<sup>3)</sup>である。史料としての価値は乏しく俗書とも言われるが、膨大な中国の歴史を短くかつ分かりやすくまとめてあり有益な書である。しかし、これを高校での漢文教材として扱うにあたっては注意しなければならない点がある。以下それについて考えつつ、授業展開の工夫を述べてみたい。

#### ① 第一段落

（呉王闔廬、伍員を挙げて国事を謀らしむ。員、字は子胥、楚人伍奢の子なり。奢誅せられて呉に奔り、呉の兵を以て郢に入る。）

筆者は高校教員だった頃、事前の教材研究をしていてこの第一段落でハタとゆきづまったことがある。それは人物関係がゴチャゴチャとしている上に、この段落の持つ意味は何なのかという困惑だったように記憶している。

本文は呉王を主語として始まっているが、呉王の話がすぐに子胥の話に変わり、子胥は「呉に奔」ったかと思うとそのまま今度は「郢に入る。」へと続いていて、何を述べているのか分かりにくい。この箇所はつまり、子胥自身の復讐が述べられているのである。それを作者曾先之<sup>4)</sup>が、いくつかの記述を圧縮してまとめたことが分かりづらくなっている原因である。ただ、「奢誅せられて」とあつてそこに復讐の発端は示されているので、これは文章上の欠陥ではないだろう。むしろぎりぎりまで文章を圧縮して書いているのは高い技術なのかもしれない。また、テーマの一貫性という意図も考えられるので巧みな文章表現と言えるかもしれない。しかし、学習者にとっては文の難しさに加えて、この教材を読みはじめたばかりの段階で「闔廬」「伍員」「子胥」「伍奢」と、立て続けに画数の多い人名や似通った人名が出てきている。ここで、読解に手間取っていると、学習者は先を読もうという意欲をそがれてしまうことになりかねない。これは、この教材の短

所と言えるだろう。

そのような事情も踏まえて、教科書の脚注には「郢に入る」について、「父の奢の復讐のために郢に攻め入った。」旨の解説が付けられているものがある。こうした注は理解の手助けになり、有益である。注がなければ解説する必要がある。

さて、ここではどのように授業を行ったらいのか。人物が多く出てくると、人物関係を図示して解説するという方法が多く行われる。そのような方法によって丁寧この第一段落を解説するやり方もあるかもしれない。だが、筆者の経験では人物関係に深入りしない方がよいように思う。この教材の中心は、そのタイトルが示すように、「臥薪」と「嘗胆」が語られる、二段落と三段落である。この第一段落の叙述の中心は子胥にあり、子胥の復讐が述べられていること、そして子胥が夫差の父の時から呉に仕えていたことを、以下の文に続く要点としてとらえることを優先して授業を行うのがよい。

高校の現場では、一定量の教材をこなしていくために教材にかけられる時間は限られている。まして、漢文にあてられる時間は少なく、できるだけ要領よく教材を終わらせたいのが実情である。まずは話の展開をシンプルにとらえることが、学習者が意欲的にこの教材に取り組むことにつながると考えられるのである。

## ② 第二段落

(a) 呉越を伐つ。(b) 闔廬傷つきて死す。子の夫差立つ。子胥復た之に事ふ。夫差讎を復せんと志す。朝夕薪中に臥し、出入すること人に呼ばしめて曰はく、「夫差、而越人の而の父を殺ししを忘れたるか。」と。周の敬王の二十六年、夫差越を夫椒に敗る。

段落が分けられ、改行されているときほど気にならないが、「a」、つまり第一段落の終わり「奢誅せられて呉に奔り、呉の兵を以て郢に入る。」から第二段落の冒頭の「呉越を伐ち、」は実は全くつながらない表現で、ここには大きな時間の隔りがある。通常、「その後」と語を補って訳しているとおりである。さらに「b」、つまり「呉越を伐ち」のあとに「闔廬傷きて死す。」と続いている箇所について、この間にも「その戦いで(呉は敗れ)」などと補う必要がある。つまり、呉が越を攻めたのにもかわらず、死んでいるのが相手の楚の側ではなく、

攻めた側の呉の王なのである。もし補いの語や解説がなければ、奇異に思う学習者もいるはずである。

さて、この第二段落では次のようなまとめが考えられる。板書の図はできるだけ簡素な方がよい。

(呉王) 夫差 — (臣下) 伍子胥

「臥薪」↑父の仇討ちのため

## ③ 第三段落

(越王句踐、余兵を以て会稽山に棲み、臣と為り妻は妾と為らんと請ふ。子胥言ふ、「不可なり。」と。太宰伯嚭越の路を受け、夫差に説きて越を赦さしむ。「c」句踐国に反り、胆を坐臥に懸け、即ち胆を仰ぎ之を嘗めて曰はく、「女、会稽の恥を忘れたるか。」と。国政を挙げて大夫種に属し、而して范蠡と兵を治め、呉を謀るを事とす。)

ここでは「太宰伯嚭越の路を受け、夫差に説きて越を赦さしむ。」とあり、そのあとに「句踐国に反り、」と述べられている。つまり、太宰嚭の勧めによって呉王は句踐を許したのだと、読者は自然に分かる表現である。しかし、最初に「臣と為り妻は妾と為らんと請ふ。」と書かれている。いったい、この願いの結末はどうだったのだろうか。何も書かれていないわけであるから、「臣と為り妻は妾と為ら」ずに済んだかのようにも思われる。しかし、越王が許されて国に帰ることができたのは、この願いが受け入れられたからであろう。太宰嚭の助言はあくまで、子胥の越王を許してはいけない(「殺すべきだ」という主張に対するものであって、その助言があったからと言って「臣と為り妻は妾と為ら」ずに済んだわけではないはずである。

故事成語としての「会稽の恥」は、ごく簡単には「敗戦の恥」の意で用いられる。それはそれで良いのだが、のちに越王が言う「会稽の恥」とはこのときの越王の屈辱の申し出を指しているのであり、実際に「臣と為り妻は妾と為」ったからこそその屈辱なのであろう。ただ、「十八史略」のこの物足りない表現は、曾先之の責任とは言えないかもしれない。なぜなら、「史記」「越王句踐世家」で

も、太宰詔が呉王を説得した言葉のあとすぐに「呉既に越を赦す。」と続いていて、やはり越王の申し出の結果がどうなったかは記されていないからである。

なぜ「史記」がそのことに触れなかったのか、その事情はよく分らない。ただ、「呉越春秋」第七「勾踐入臣外伝」にはこのことに関してかなり詳しい記述がなされている。たとえば、子胥の懸命な諫めにもかかわらず、夫差は越王を殺さず、車の馬を御したり、馬を養ったりさせている。そして、

越王はふんどしのようなものをつけ、粗い布の頭巾をかぶっていた。夫人は縁なしの裳をき、前襟を左に合わせる襦をつけていた。夫が飼料を切りぎざんで馬を養い、妻は水を汲み、掃除をした。三年間怒ることなく、顔に恨みの気配をあらわさなかった。

などと述べられている。ほかに驚くべき記述もある。病気になるた夫差に対し、句踐は范蠡にどのようにしたらよいかを問うている。范蠡は夫差を見舞うように言う。

大王（越王）がご自分の方から請うてお会いできたら、呉王の糞を求め、それを嘗め、顔色を見、拜礼して祝うべきです。それは死ぬような病気でないといひ、癒えて起き上がる日を約束されるように。

そして、句踐は実際にそれを実行している。句踐は無事に越に帰るために、筆舌に尽くしがたい辛苦を経験したのである。

さて、話を授業実践にもどそう。「c」つまり「句踐国に反り、」の前に、何らかの補いが必要である。通常、ここには「こうして」「その後」などの補いを入れて訳されている。授業では本文を尊重しなければならぬから、口語訳としてはそれで充分だと言えよう。ただ、ここは話のヤマ場として、少し時間をとって学習者に問いかけてみたい。「臣下となり、妻は召使いになると書いてあったけど、それはどうなったのだろうか。」と。もちろん、本文からは明確な答えは出ない。「君たちの想像としてはどうだろうか。」と考えさせてみたい。授業者が最終的に用意する解説としては「ある歴史書によると、句踐は呉王の下僕として車の御者となり、夫人も水くみや掃除などをして、三年間怒ることなく、顔に恨みの気配をあらわさず、屈辱の生活に耐え忍んだらしい。」である。この問いかけによって、学習者のこの教材に対する関心は深まり、次に続く「嘗胆」の記述はさらに重みを持って感じられることだろう。

第二段落と同様に、この段落でも次のような板書が考えられる。図示するには

それぞれ授業者のやり方があろうが、前段との対比が考えられていなければならぬ。

（越王）句踐 — （臣下）范蠡  
= 「嘗胆」↑「会稽の恥」を忘れないため

以上、特に読解をスムーズに行うための補足を中心に述べてみた。簡潔を宗とする漢文にあつては、どの教材でも適切に語を補うことは必要なことであるが、「十八史略」教材では特にこの点に注意が必要である。

④ 第四段落

（太宰詔、子胥謀の用ゐられざるを恥ぢて怨望すと譖す。夫差乃ち子胥に属鏤の劍を賜ふ。子胥其の家人に告げて曰はく、「必ず吾が墓に檜を樹ゑよ。檜は材とすべきなり。吾が目を抉りて、東門に懸けよ。以て越兵の呉を滅ぼすを觀ん。」と。乃ち自剄す。夫差其の尸を取り、盛るに鴟夷を以てし之を江に投ず。呉人之を憐れみ、祠を江上に立て、命づけて胥山と曰ふ。）

この段落ではとりたてて教材としての短所はないと思われる。ここを読んで学習者はどのように感じるであろうか。段落は短い、いくつかの事柄が述べられている。またしても繰り返される太宰詔の讒言、夫差の子胥に対する死の命じ方、死に臨んでの子胥の言葉、それに対する夫差の仕打ち、呉の人々の同情、と盛りだくさんである。その中で一読して気になるのは、なぜ夫差はそこまで子胥にひどい仕打ちをするのか、ということである。父の代から仕えてきた忠臣に死を命じた上に、亡骸を袋に入れて川に捨てさせるとは！

本文をたどって考えてみると、それは特に「檜は材とすべきなり。」と関係していると分かる。授業を進める段階では、「ひさきは、棺の材料にできる。」と訳して、それでは誰が入る棺なのかと考えることになるだろう。その答え、つまり夫差が入る棺なのだと思えるための根拠の一つが、後に描写されたこの夫差の激しい怒りの振る舞いなのである。

実は、「子胥其の家人に告げて曰はく」以降について、「史記」「伍子胥列伝」とこの描写はほとんど同じのだが、大きな違いが一つある。それは「史記」で

は、子胥の自刎のあとに、「呉王之を聞いて大いに怒る。」という説明があることである。曾先之は呉王が怒ったという記述を削っているのである。これは長所であろうか、短所であろうか。

確かに「怒る」と書いてあれば分かりやすい。しかし先に述べたように、呉王の怒りはその振る舞いに表れているし、この箇所は授業展開の中で「槓は材とすべきなり。」と関係させて本文読解の材料として生かすこともできる。曾先之も「呉王之を聞いて大いに怒る」はなくても文章として成り立つと考えてこの言葉を削ったに違いない。

### ⑤ 第五段落

(越、十年生聚し、十年教訓す。周の元王の四年、越呉を伐つ。呉三たび戦ひ三たび北ぐ。夫差姑蘇に上り、亦た成を越に請ふ。范蠡可かず。夫差曰はく、「吾以て子胥を見る無し。」と。頓首を為りて乃ち死せり。)

第四段落における子胥の死に続き、この段落では夫差の死が述べられて終わっている。この二つの挿話は、互いに関連を持ちつつそれぞれ異なった特異な死の在り方が描写され、「臥薪嘗胆」の故事をさらに重厚なものにしている。

この中で注目してよいと思うのは、傍線部の、夫差の和解の申し出に対して「可かず。」とそれを拒否しているのが、越王ではなく范蠡になっているという点である。越王の態度は何も述べられていない。これも本来なら説明が必要な箇所なのであるが、曾先之は「史記」のこまかな描写を切り取っているのである。「史記」「越王句踐世家」によれば、「句踐忍びず、之を許さんと欲す。」とあり、越王は呉王を許そうとしていたことが分かる。だが、越王のことを述べないのは欠点ではないかもしれない。読んでいるときにはそれほど違和感を持たない記述だとも言える。曾先之には、越王にとって范蠡という臣下の存在が大きいことを示す意図があったと思われるが、同時に「臥薪」「嘗胆」の主要なストーリーを述べてしまえばあとはテンポ良く話を終わらせたいという考えもあったのであるう。

### ⑥ 振り返り

以上で段落ごとの検討は終わった。以下には、この物語の内容を振り返ってみ

たい。授業実践でそれを行うか否かを別にして、考えてみたいのはこの話の主人公は誰かということである。この話はそもそも史書の記述を切り詰めたもので、新しく創作されたものでもなく初めから完結された物語でもない。だから、この問いはあくまで理解を深めるための一つの方法として考えてみたいのである。

ある学習者は、結局越が勝ったのだから越王ではないかという意見であった。それも一つの見方である。しかし復讐がテーマの話であり、「臥薪嘗胆」のタイトルからしても主人公は呉王越王の二人ということになるだろう。だが、別の考え方もある。全体の記述の仕方を見ると、讒言によって死を賜ることになる子胥に関する記述が多く、第三段落以外はすべて子胥が関係している。つまり、ストーリーの全体からは、子胥が事実上の主人公として見ることもできよう。呉越の抗争における悲劇のヒーローである。この本文は「十八史略」の「春秋戦国」の「呉」に載せられており、その典拠も「史記」「呉太伯世家」「伍子胥列伝」に多く拠っている。そのような点からも子胥が主人公であると言えるかもしれない。さらに、別の考え方もできる。子胥と范蠡の二人が実は主人公であるという見方である。子胥に関する記述は多いものの、忘れてはならないのは、夫差のもとに子胥がいたように句踐のもとには范蠡がいて、この二人の名臣の存在がそれぞれの王の命運に大きな影響をもたらしていることである。呉王、越王二人の結末の違いはそれぞれの名臣の言葉に従ったかどうかによると言える。

子胥と范蠡にはそれぞれまたエピソードがあるが、それは授業で深入りすることではない。ただ、呉王越王の対比とともにこの名臣二人の対比を考えておくことは、この小文が緊密な構成によって印象的な物語になっていることの要因としてきちんと考えておくべきことである。第二、第三の段落において図をまとめたときに、臣下の二人を対比的に書いたのは、その意味もあったからである。

### 五 まとめ

「臥薪嘗胆」はよく知られた故事を中心として興味深い内容を持ち、中国古代の歴史が手際よくまとめられている史伝教材である。文法や訓読の指導についても効果的な材料がある。しかし、「十八史略」の文章は教材として見ると簡略化された叙述の中に注意すべき点がある。「臥薪嘗胆」においては、それは教材としての短所ではあるが、授業者がその点を認識することで、授業展開の中でその欠点は充分補えるものである。「十八史略」の作者曾先之は史書の記述に基づ

きながら、作者なりの配慮を凝らして文章の簡略化に努めているようである。<sup>(1)</sup>むしろ授業者は、簡潔な文体の特性に留意することで読解指導を深めることができ、短所を長所に変えて漢文学習の効果をさらにあげることができると言える。

注

(1) 段落分けの仕方については教科書各社によって少し違いが見られる。六段落に分けている教科書もある。

(2) 訳し方は「AをするのにBによる」、または「BでAする」である。

(3) 『アジア歴史事典 第四卷』(平凡社・一九六〇年)三〇二頁。

(4) 『史記』「伍子胥列伝」では、「越王勾踐乃以餘兵五千人、棲於會稽之上、使大夫種厚幣遺吳太宰嚭以請和、求委國爲臣妾。」となっており、この「使」の係りについて、新釈漢文体系88『史記八(列伝一)』(水沢利忠著・明治書院・一九九〇年)では「請和」までとせず、「臣妾」までと見るべきである。「委國爲臣妾」も講話の条件である。」と述べられている(二三五頁)。

(5) 新釈漢文体系85『史記五(世家上)』(吉田賢抗著・明治書院・一九七七年)では、「越世家第十一」の「吳既赦越、句踐反國」の語釈に、「吳越春秋を案ずるに、吳は越を赦し罷め帰る。句踐と妻と呉に入朝し、之を留めて三年を踰ゆ。乃ち路を行ひて始めて積き帰るを得たり。…史記にこれを言はず。前書は晩く出で、史遷は見るに及ばざるのみ」という明の陳寔の言葉を載せている(五百頁)。

(6) 東洋文庫87『吳越春秋』(平凡社・佐藤武敏訳注・二〇一六年)による。二〇三頁。原文は「越王服憤鼻、着樵頭。夫人衣無縁之裳、施左關之橋。夫斫剗養馬、妻給水除糞灑掃。三年不愠怒、而無恨色(越王憤鼻を服し、樵頭を着る。夫人無縁の裳を衣、左關の橋を施す。夫は斫剗し馬を養ひ、妻は水を給し糞を除き灑掃す。三年愠怒せずして、恨色無し)。(周生春著『吳越春秋 輯校匯考』上海古籍出版社・一九九七年)一一二頁。

(7) 前掲書『吳越春秋』二〇八頁。原文は「願大王請求問病、得見、因求其糞而嘗之、觀其顔色、當拜賀焉、言其不死、以瘳起日期之(願はくは大王請ひて病を問はんことを求め、見ゆるを得ば、因りて其の糞を求めて之を嘗め、其の顔色を觀、當に拜して焉を賀すべし、其の不死を言ひ、瘳ゆるを以て起日之を期せんことを)。」前掲書一二五頁。

(8) 『十八史略』が省略の多い文章であることから、教材として注意を促す見解は以

前からあった。たとえば、星野謙一郎氏は「漢文教材研究講座『十八史略』の指導1」「十八史略」解題」(月刊国語教育第六卷第六号・一九八六年)の中で、「十八史略」は「教える立場になるとかなり厄介なものである。それは多くの歴史書からの引き写しであるために省略が多く、それらをしっかりと理解していないと説明がしにくいからである。」と述べている。また、向高亜由美氏の「『臥薪嘗胆』における授業の試み」(大修館書店『漢文教室』第一八八号・二〇〇二年)では、「十八史略」は省略が多いことから「史話としての面白さがダイレクトに伝わりにくい」として、「史記」の口語訳を用いてグループ学習に取り组ませ、「十八史略」と「史記」の記述の違いに気付かせようとした試みが報告されている。

(9) 『伍子胥列伝』の記述は「乃告其舍人曰、必樹吾墓上以梓。令可以爲器。而抉吾眼、縣吳東門之上。以觀越寇之人滅吳也。乃自剄死。吳王聞之大怒、乃取子胥尸、盛以鴟夷革、浮之江中。吳人憐之、立祠於江上、因命曰胥山。」となっている。なお、『左伝』哀公十一年には、「將死曰、樹吾墓。槨可材也。」との記述が見える。

(10) たとえば子胥については、その復讐に関して、「史記」には、郢に入ったあと、父と兄の仇である楚の平王の墓を暴いて、その尸を掘り出し、三百回むち打ったと述べられている。范蠡については、「史記」に、その後結局越を離れ、姓名も変え、やがて巨万の富をなした等々の記述がある。

(11) 若林力氏の「教材研究・臥薪嘗胆について」(大修館書店『漢文教室』第一五三号・一九八五年)は「臥薪嘗胆」の典故について丁寧に考察しているが、「嘗胆」に比して「臥薪」が辞書に載せられていないことを述べ、文末に、「十八史略」そのものが歴史と文学の結体の上に生まれてきたものであるから、吳王夫差の「臥薪」が曾先之の創作であったとしても、一向にさしつかえない。私はむしろそのほうが史話として面白いと思っている。」と述べている。確かに、「朝夕臥薪中」は「史記」にはない描写であるし、夫差の「夫差而忘越人之殺而父邪。」も、もともと夫差の父の言葉であった(『史記』「吳太伯世家」「伍子胥列伝」)。